

# 創作 詩編十八編

山之内 勉

## 目 次

### I はじめに

### II 2018年度南日本文学賞（詩部門）最終候補作品「レクイエム」より

#### ○ 幽霊船

### III 南日詩壇入選作品より

#### ○ 紙飛行機

### IV 2019年度南日本文学賞（詩部門）最終候補作品「学校」より

#### 一 遠足

#### 二 クラスマッチ

#### 三 掃除

#### 四 不登校

#### 五 スクールバス

#### 六 文化祭

#### 七 修学旅行

#### 八 体育祭

#### 九 創立記念日

#### 十 テスト監督

#### 十一 出陣式

#### 十二 雪合戦

#### 十三 ロードレース

#### 十四 卒業式

#### 十五 全校朝礼

#### 十六 寄宿舍

## I はじめに

本稿は筆者の創作を集めたものです。2018年度・2019年度南日本文学賞詩部門（南日本新聞社主催）に応募した詩編を中心に構成しました。2年連続で最終候補3作品に残り、2年連続で受賞を逸しました。最終選考に残ったとはいえ、南日本文学賞には100点と0点しかないので、筆者の作品は0点です。とても紀要に掲載する価値があるとは思えませんが、「厳しい批評をもらうことで今後の精進につなげるべきだ、逃げてはならない」との強い勧めを受け、思い直し、掲載させていただくことにしました。江湖のご叱正を賜れば幸いです。

## II 2018年度南日本文学賞（詩部門）最終候補作品「レクイエム」より

### ○ 幽霊船

レポートはね、消えちゃったのよ、先生。

なつ子さんの声は明快だった。

通信制高校には還暦を過ぎた学び直しの生徒さんが多くいる。登校する代わりに郵便でレポートをやりとりし合格すれば高卒資格が得られる。十五歳で美容師見習いとなり半世紀以上働き続け娘と孫に店を譲ったなつ子さんは、六十七歳の春、念願の女子高生となり、わたしのクラスに来た。

最後の一枚が出ていませんよ、なつ子さん。

レポートはね、消えちゃったのよ、先生。ちゃんとやりました。

なつ子さんの声はむっとしていた。

月一回、一年にわたり休まずレポートを出し続け、最後の十回目を仕上げ、手にしっかり握って家を出た。いざポストに投函しようとした刹那、手元にレポートがないことに気づいた。地面や側溝に目を凝らし、落ち葉をかき分け、這うようにしていま来た道をたどって帰った。家に戻ると玄関からトイレ、ゴミ箱、ベッドの下まで探した。

よくあることよ。

あきらめます。

老眼で英和辞典を引くのは辛かった。憶えた因数分解の公式は一晩で消えるのに、肩凝りは何日も居座った。しめきりをメモした付箋が護符のように家中に貼られた。レポートは最後の一枚が欠けても失格である。たたかいながら積み上げてきた一年間の、あっけない幕切れだった。

よくあることよ。

あと一步で渡り切るところだった橋が足元から崩落する。数しれぬ垂直の失意で穿たれたなつ子さんの深淵を、凶らずも垣間見た若いわたしは、茫然とするほかなかった。

一週間後、ひどく汚損して波打ち、毛羽立ち、靴に踏まれた跡さえ付いた異形の封筒が、わたし宛てに届いた。異界からの訪問者のような妖気に思わず息を呑んだ。恐る恐るひらいてみると、なつ子さんの消えたレポートだった。狐につままれた気持ちでなつ子さんに電話した。話しているうちに、投函しに行く途中で道端に落としたレポートが、雨にうたれ、天日にさらされた後、だれか親切な人に拾われ、ポストに投函されたのではないか、という結論にわたしたちは落ち着いた。

とっくに難破したと思っていたのにさ、ひょっこり帰還した幽霊船ね、まるで。

奇跡ですよ。どんな人が拾ってくれたんでしょう。

よくあることよ。

神さまは人間を使って奇跡を配るからね。きっと普通の人よ。

なつ子さんの人生の綾がふいに立ち昇ってきた。若いわたしには見たこともない鮮やかさで。

なつ子さんみたいな人はめったにいませんよ。

受話器の向こうの声が嫣然と笑った。

### Ⅲ 南日詩壇入選作品より

#### ○ 紙飛行機

零点の答案用紙が  
空を飛んでいる。  
折られて飛行機になり  
機首をとがらせ  
古い校舎に挟まれた  
日当たりの悪い中庭を  
爽快に切り裂いていく。  
あんなに哀しい紙を  
あんなに美しく変身させたのは  
あの子の天才だ。

いま私に見えてきたばかりの。

あの子は幼い日のように  
ただ無心に紙飛行機を追いかける。

忘れかけていた笑顔が

あの子いっぱい溢れだす。

零点の答案は

私の安堵を乗せて

悠々と空を旋回する。

(2019年7月25日南日本新聞掲載)

IV 2019年度南日本文学賞（詩部門）最終候補作品「学校」より

一 遠足

斜めに高度を下げながら  
私に近づく観覧車の  
透明なゴンドラ。  
客商売のくせに  
立ち止まって挨拶もせず  
動いたまま人を掬い  
再び上昇に転じる。  
ギアとチェーンと油圧の算段どおりに  
律義に働く  
愚鈍な巨獣。

遠足モ教育活動ノ一環デス  
遊ビデハアリマセン  
学校ト同ジデス  
先生がハンドマイクで叫んだ。  
なるほど観覧車は  
早生まれの  
か細い足の私には  
つねに周回遅れの  
淋しく  
退屈な無限軌道。  
タイミングを逸して流れに乗れない  
みじめな私をつまはじく

休み時間の会話の輪。  
さきに乗った生徒たちは  
どこへ行ったのだろう。  
観覧車からは  
だれも降りてこない。  
乗れば帰って来られない気がして

足はますます  
すくんだまま  
ゴンドラを幾つも見逃し  
焦り  
息が足りず  
目に涙をため  
先生に怒鳴られ  
後ろに並んでいる連中に  
ぼんと  
背中を押され  
つんのめった瞬間  
目の前を横切る透明なゴンドラの  
後ろ髪を  
とっさにつかんだ。

地平線の消えた碧空に向かって  
私の魂はゆっくりと昇っていく。  
空は  
頭上から垂れさがり  
濃紺の裾で  
私を足元から包み始める。  
耳には  
黒く冷えた霧雨が  
鼓膜を溶かして  
沁み入ってくる。  
叫び声をあげるような  
歯と舌と唇の木炭画が  
小さくなった先生の  
顔の上に張り付いている。

## 二 クラスマッチ

ミイラの皮膚に似た  
廃校のグラウンドの表面に  
重機の集団が整列している。  
まもなく  
解体工事が開始され  
グラウンドは魂の奥まで掘り起こされる。  
私が廃校を訪ねたのは  
グラウンドに埋まっている  
無数の足跡の一枚を  
かつて勤めた証しに  
持ち帰るため。

雨天決行のサッカーの試合が  
梅雨をふんだんに吸い  
グラウンドから溢れ出している。  
敵も味方も  
勝者も敗者も  
モノトーンに塗り籠められ  
泡立つ泥と  
飛び跳ねる足跡とが  
終わりのない覇を争っている。  
ぬかるみにからめとられ  
身動きできないサッカーボールに  
生きた泥のシルエットたちが蝟集する。  
トラップをばらまくように  
次々と刻印される足跡。  
それを輪郭から舐めまわし  
呑み込んでいく泥の舌。  
敵も味方も  
勝利も敗北も

残らずグラウンドに練り込まれていく。  
生徒たちは  
ただ  
高校最後のゲームを生き  
泥のミネラルで喉を潤しながら  
できるだけ深く  
多く  
種子を仕込むように  
足跡を打ち抜き続ける。

重機が錆びた鉄の匂いを放ち始めた。  
驟雨だ。  
昔から水はけの悪かったグラウンドは  
たちまち水田のようになった。  
生き返ったグラウンドからは  
生徒たちの足跡が  
次々と生えてくる。  
私は泥の中に踏み入り  
足跡を探す。  
視界の一角で泥がゆがみ  
隆起した。  
眼球から蘇生した  
ムツゴロウが  
しだいに全身の細胞を目覚めさせ  
力をたわめ  
狙いを定めて  
泥に這いつくばっている。  
見覚えのある目が  
きれいに潤んでいる。

### 三 掃除

授業のしっぽが  
掃除のあたりに  
食われはじめる。  
チャイムが鳴った。  
BGMがかかる。  
学校は一日で最も  
落ち着きのない  
不安定な時間のガスに  
覆われていく。

用具棚を開ける。  
せまい暗闇に生徒が立っていて  
箒を手渡してくれる。  
床を掃く。  
箒は床を削り  
粉塵を盛り上げる。  
粉塵は掃除機に吸引される。  
床の摩滅は掃除に意味を与え  
教師と生徒の  
達成感を育む。  
掃除の終わり。  
用具棚を開けると  
さっきの生徒が  
せまい暗闇に立っている。  
箒を手渡し  
戸を閉める。  
明日の今頃には  
箒の先がすどく研がれて用意され  
床はさらに薄くなる。

雑巾は  
悲惨な存在だが  
掃除のたびにきれいになる。  
机を  
手すりを  
便器を

拭いていく。  
雑巾はどんどん白くなる。  
容赦なく痛めつけられ  
縫い目も 角も  
おもても うらも  
たても よこも  
全てを奪われ  
くらげのように透き通る。  
掃除のあと  
いちばん美しくなるのは  
人の心でも  
校舎でもなく  
雑巾。

校庭のはずれの草は  
青い歯列をつらね  
あの子の指を切る。  
長い髪を束ねるように  
葉をまとめてつかみ  
かたくなに張った根を  
引き抜く抵抗感は  
意外に手間取る小動物の  
首を絞めるような  
いのちの  
暗い手応え。  
フェンスの向こうへ  
放り投げると  
草は宙返りしながら  
根を振り乱し  
気孔を拡げ  
葉を鳴らしながら  
飛び去って行く。  
草が棲んでいたあとの  
くぼみには  
血がたまり始める。

## 四 不登校

### I

のりの効いたシート。  
消毒の匂い。  
ここはどこだろう？  
突然返してもらった意識に戸惑いながら  
ゆっくりと上半身を起こす。  
それまで浸っていた夢の余韻が  
砂に変わって  
さあっと  
ベッドの下へこぼれ落ちた。  
しまった。  
あわてて拾い集めようとする  
カーテンが開いて  
養護の先生の顔が現れた。

保健室を出てからも  
こぼれ落ちた夢が気になった。  
掃除の時間に  
ちりとりで集められ  
消しかすや髪の毛やパン屑といっしょに  
捨てられると思うと  
悔しい。

### II

曲がらなかった  
曲がり角に  
あの子は惹かれる。  
一瞬だけちらりと見えた  
曲がり角のむこうの世界。  
通りすぎてから  
気になって  
振り返ると  
もう曲がり角はふさがっている。  
一瞬の光景が

ひたいに貼りつき  
後悔と焦燥が  
生涯の伴侶になる。

### III

あの子は学校を休んだ。  
思い出が急に降りだし  
身体の芯まで濡れて  
風邪をひいたと連絡してきた。

授業中でも五分おきに  
天気予報をスマホでチェックする。  
降りそうな時は保健室に避難する。  
その日は先生に没収され  
チェックができなかった。

思い出に濡れるのは身体に毒だ。  
熱が出る。  
めまいがする。  
腹が痛い。  
吐き気がする。  
皮膚が爛れる。  
髪が落ちる。

薬はないよ。  
濡れないのが一番の薬。  
医者診断は明快だった。  
あの子は職員室に紙を出した。  
異装許可願  
帽子とショールが  
教室でも必要です  
できれば傘も  
学校長殿

許可は下りなかった。  
こうして  
あの子は  
床下に深い穴を掘り  
学校を埋めた。

#### IV

だれよりも  
深く考え  
長く感じ  
遠くまで歩いた。

だれよりも  
まっすぐ  
目が潰れるほど  
暗闇の奥を見つめてきた。

だから

#### 五 スクールバス

生徒のいない  
スクールバスは  
夜明けとともに車庫を出る。  
大きな車輪は  
見かけによらず軽やか。

停留所 停留所で  
生徒が乗り込むと  
バスはだんだん重くなる。  
テストの朝は  
一晩かけて詰め込んだ生煮えの知識と  
消化されない夜食とが  
パン種のように発酵し  
ふくらんで

あなたは  
カーテンを数年ぶりに開けた時  
世界が光に満ちていたことに  
だれよりも  
深く納得することだろう。

青白い顔  
とひとは言う。  
弱さをひとに見せる  
あなたの強さを  
日焼けした人々が  
あなたに見るのはいつだろう。

孤独をひとと  
分かち合いたいという  
あなたの矛盾に  
あなたの人間らしさを見るのは  
いつだろう。

車体を圧迫する。  
ときおり底が抜け  
生徒が二三  
消える。  
一瞬  
バスは軽くなる。

正門の接近は  
生徒の心をぐっと重くする。  
タイヤがつぶれ  
速度が自然に落ち  
バスは玄関前で  
きれいに停車する。



オハヨウゴザイマス  
出迎いの先生  
生徒会役員  
保護者  
朝掃除中の部活動生  
そろえた声が  
カーテンをさっと引くように  
車内の澱んだ空気を払う。  
生徒は  
パン種を車内に残し  
若い腹をさわやかにすかせて  
バスを降りていく。

## 六 文化祭

明日の文化祭の  
展示品がまだ半分も完成していない  
三年一組。  
床一面にひろげたブルーシートでは  
段ボール ベニヤ板 角材が  
いびきをかき  
空き缶 発砲スチロール 風船が  
歌い  
古新聞 牛乳パックが  
腐っている。

暴力事件で退学したばかりの  
金髪Xがふらりとやってきた。

Xは両腕で教室をまるごとほうり投げ  
宙返りさせた。  
着地した教室は失神し  
おとなしく展示品となった。  
三年一組展示作品（立体部門）

生徒を降ろした  
スクールバスは  
そのまま  
パンの移動販売車となり  
校区を一周する。  
車庫に戻ったスクールバスは  
夕方の出発に備え  
ボディを洗い  
車内に花を植え  
蝶と蜜蜂を放つ。

「文化祭前夜の教室」  
Xは教室の窓ガラスに  
真っ赤なペンキでそう書きなぐると  
仕上げにソフトクリームを投げ込んで  
帰って行った。  
ソフトクリームだけが  
正気を保ち  
ゆっくりと  
溶けていく。

明日の文化祭の  
準備の気配がまったくない  
三年五組。  
生徒はみな  
単語帳をひろげたり  
小論文を書いたり  
三角関数のグラフを作図したり  
過去問を解いたり。

暴力事件で退学したばかりの  
金髪Xがふらりとやってきた。

Xは教室をそっと持ち上げ  
床下の活断層を  
四十八時間ぶん  
未来にスライドさせた。  
教室は  
知らないうちに時計が進み  
展示品となった。

## 七 修学旅行

スケッチブックと話し込む修学旅行生。  
原爆ドームに絵筆で  
まるい屋根をかぶせ  
彩色しはじめた。  
壁を造りなおし  
煉瓦を積みなおし  
窓ガラスを嵌め  
芝生と樹木を植え  
原爆ドームになる前の  
原爆ドームが完成した。  
スケッチブックから切り離すと  
卵に詰め  
近くの公園の樹上の  
鳩の巣に置いた。  
孵化して  
白い鳩の飛翔になるのを待ちきれず  
修学旅行生は  
帰りのバスから  
おおきく身を乗り出した。  
  
硬くガラス化したドーム状の時間を

三年五組展示作品（立体部門）

「文化祭翌朝の受験生」  
Xは教室の窓ガラスに  
真っ黒なペンキでそう書きなぐると  
仕上げに仔猫を投げ込んで  
帰って行った。  
仔猫だけが  
正気を保ち  
教室の隅にヤモリを追い詰めている。

自由に  
風が吹き抜け  
雨が穿ち  
苔が覆い  
百足が這い  
蝶が飛び回る。  
時間を堰き止めてきた  
ドームが  
すこしずつ傾いていく。

決壊し  
濁流となった時間の河に  
卵が流されていく。

スケッチブックと話し込む修学旅行生。  
絵筆で  
瓦礫を回収し  
コンクリート片と煉瓦を積み  
錆びた鉄骨を組み合わせる。  
原爆ドームになった後の  
原爆ドームを

建て直すと  
修学旅行生は  
鶴のかたちにして  
近くの公園に吊るす。  
折り鶴は

振り子のように  
規則正しく揺れ始める。  
修学旅行生は帰りのバスから  
折り鶴を見て  
腕時計の針を合わせる。

## 八 体育祭

遠くの  
台風の眼の射程が捉えた  
体育祭の上空。  
グラウンドに迫る烏帽子岳の背後から  
次々と飛来する  
光る雲の編隊。  
青い空気を殺ぎ落としながら  
私の頭上を横切り  
荒々しい航跡を残して  
錦江湾の向こう  
桜島の東へと去っていく。

音もなく  
ゆっくりと自転する大地では  
団旗が三色に躍り  
テントが脚を踏み鳴らし  
砂埃が秋の空気に渦を掘り  
体育祭というひとつの事象が  
時間と場所と人の精魂を  
貪欲に呑み込みながら  
大きな生き物のようにならぬ  
身もだえし  
大地をつかんで離さない。

私は  
はだしで走る少年を見る。

最終コーナーで内側に傾斜する  
少年の四肢の  
角度の心地よさ。  
消石灰のラインを踏み  
真っ白になった  
足裏は  
大地によって研磨され  
白い金属光沢を誇っている。  
露出する若さの断面が  
大地から受け取る  
未知の神経の痛みは  
輝きの代償として  
踵をしだいに  
赤く染め始める。

少年は  
ゴールの先の風景を  
知らない。  
大地の自転の先にあるゴールへ  
地球よりも早く  
地球を回ろうと  
少年は  
誰も見たことのない表情で  
白い地平線の  
テープを切り続ける。

## 九 創立記念日

慰霊碑が  
朝露に濡れている。  
祭壇前のパイプ椅子に座り  
談笑する  
同窓会長 P T A会長  
亡師亡友遺族代表  
校長 教頭 事務長  
幹事たち。  
定刻は過ぎ  
神職はまだ来ない。  
寡黙で  
姿勢のよい  
生徒会長席の  
少女が  
榊の深緑や  
供物の照柿  
真鯛のうろこの乱反射を  
凝視している。

きのう  
生徒会室の窓ガラスに  
雀が衝突して  
死んだ。

部屋にいたのは  
きょうの挨拶文を書いていた  
生徒会長の少女ひとりだった。  
少女は  
雀の瘻癩を見守っていたが  
やがて  
自分のマグカップに入れ  
蓋をして  
校庭のはずれの  
慰霊碑の陰に埋めた。

神職の  
衣擦れの音。  
鎮まる談笑。  
祝詞が  
ゆらゆらと  
慰霊碑一帯を領し始める。  
少女にだけ聞こえる  
もう一層下にある切実な音域。  
少女にだけ見える  
桜桃のような  
雀の魂。

## 十 テスト監督

### I

一限目 数学 I A

問題を配り終わると  
教室の後ろに立つ。

ここから見渡す

生徒はみな

背中で私を警戒している。

出席確認は

背中を順に見て

心の中で名前をつぶやけばいい。

一番 F 二番 H

三番

三番目の子で行きづまる。

あの背中は誰だ？

見覚えがない。

あんな子がいたっけ？

たしかに座敷わらしはときどき紛れ込むが。

そっと近づき横顔を盗み見る。

なんだ

P じゃないか。

こんな背中をしょっていたのか。

あの明るい子が

こんなに淋しい

重そうな背中を

海亀みたいに。

去年から担任で

わかったつもりになっていたが

Pの半身しか見ていなかったのか。

それとも

Pの甲羅は

さいきん背負ったものなのか。

Pがちらりと

変な目でこちらを見る。

座敷わらしはくすつと笑った。

### II

三限目 国語総合

問題を配り終わると  
教室の後ろに立つ。

ここから見渡す生徒は

背中で問題を解いている。

思考する子どもの背中は

知識についての垢を落とし

常識を解体し

歴史に介入し

新たな知

新たな美を創造する。

Qの背中に近づきそっと答案を覗いてみる。

(設問)

平安時代ヲ代表スル女流文学者ノ

名前ト代表作ヲ答エナサイ。

(解答欄)

紫式部 源氏物語

清少納言 平家物語

源氏

平氏

平家

というグラデーシヨンの美。

紫清

源平

というシンメトリーの美。

出る幕のなかった

みやびな色男の苦笑が薫ってくる。

Rの背中に近づきそっと答案を覗いてみる。

(設問)

「菜の花や月は東に日は西に」

コノ俳句ノ作者名ヲ答エナサイ。

(解答欄)

田中一村

これがもし

島崎藤村

なら零点だが

これなら百二十点でもいい。

晩春 東 西

菜の花 夕陽 月の出

絵画的な句を見て

Rは奄美大島出身だから

郷里の画家の記念館の絵を思い浮かべたの  
だろう。

蕪村は画家でもあったから

名前が「○村」で似ているから

Rの背中 of 奔放な血の巡りは

田中一村

というキャラクターに

瞬間移動したのだろう。

Sの背中に近づきそっと答案を覗いてみる。

(設問)

「二十億光年の孤独」

コノ詩ノ作者名ヲ答エナサイ。

(解答欄)

高村光雲

そういえば教科書には

この詩の次のページに

「刃物のやうな冬が来た」

が載っていたが。

それが化学反応の触媒になったか。

二十億光年

アンドロメダ星雲

高村光雲

高村光太郎

谷川俊太郎

Sの背中では

つねにビッグバンが起こっており  
創世記が書き換えられている。

III

五限目 生物基礎

配り終えると

教室の後ろに立つ。

ここからは

ただ

四十一枚の背中が見える。

通知表 財布 笑顔の含有量

身長 ルックス 運動神経

学校が好き 嫌い

歌がうまい へた

狂気を飼っている 飼っていない

なにも関係ない。

ただ平等な

四十一枚の背中。

いま刺せば

その子を殺してしまうかもしれない

無防備な背中。

その脆さを畏怖する私を

背中を透かして見返す

子どもたちの心臓。

私は

この部屋にある

心臓の数をかぞえてみる。

空港で見た心臓。

ヘリコプターで大学病院に運ばれる

水色のクーラーボックス。

あれがいま

教室に

四十一個ならんでいて

飛ばば天井までとどく血しぶきを

必死に制御して

猛スピードで全身に回している。

私の胸にも  
五十年使い古したものが  
仕舞ってある。

## 十一 出陣式

校舎下の中庭の  
夜間照明の冷えた光線を横切りながら  
太い湯気が  
灰色の龍のように  
何本も身をおどらせ  
暗い空へ昇っていく。  
受験生の親たちは  
もちを焼き  
あずきを煮て  
人生が練り込まれた手で  
ちからづよく  
寸胴鍋をかきまぜている。

柵のない  
校舎の屋上への鉄扉を開け  
受験生たちは  
一年に一度だけ許されて  
日の出を待つ。  
氷点下の風は  
ただ黎明を劇的にするために  
より冷たく  
厳しく  
容赦なく  
と希われる。

遠くから  
始発のディーゼル列車の  
暖機運転の音が聞こえてきた。

四十二個目の  
連帯感。

一明ケマシテオメデトウゴザイマス  
闇がもっとも  
濃く 深く 黒く  
澄み切った瞬間  
日輪が空全体にひろがった。  
目を細め  
茜色の新年をみつめる子。  
目をぎゅっと閉じ  
うつむいて  
手を合わせる子。  
きのうとは別人のライバルの横顔に  
目をみはる子。

ひとりの受験生が  
小さな賭けをする。  
一ぜんざいに  
もちが一つなら志望校合格。  
二つなら  
プラス 猫の帰還。  
三つなら  
プラス 車椅子卒業。  
もちが入っていなければ一

受験生の親たちは  
一椀一椀ていねいに  
ぜんざいをついでいく。  
親たちは賭けをしない。  
どの椀にも

あずきから小さく突き出す  
もちの角が  
春泥から顔をのぞかせた新芽のように

いとおしく  
やわらかく光っている。

## 十二 雪合戦

二年ぶりの大雪に  
顔を赤く焼かれて狂喜する  
南国の受験生。  
臨時休校の校舎に  
自習をしにきたはずの受験生は  
まっすぐ  
グラウンドに飛び込み  
雪の弾薬庫を幾山か作ると  
するどい奇声を発し  
十日先の受験戦争へ  
発砲し始める。  
雪に溺れ  
もがき  
雪の玉の白いエネルギーを  
敵にぶつけて確かめ合う  
若い兵士たち。  
氷の碎ける爽やかな音。  
揺れる樹木。  
歓声。  
怒号。  
雪に集団感染した子らに

付ける薬はない。  
私は  
自習監督をポケットにしまい  
誰もいない教室からグラウンドへ出て  
雪だるまを造り始める。  
等身大になると  
合戦に飽きた生徒たちが  
標的にして雪の玉を  
次々に投げつけてくる。  
命中するたびに  
雪だるまは肉付けされ  
成長し  
二メートルほどの高さになった。  
センター試験本番が終わるころ  
雪だるまは溶けている。  
その時  
私の雪だるまの  
支柱の正体が  
露わになるだろう。



### 十三 ロードレース

初冬のあの子は  
風速ゼロの校門から発射され  
幹線道路に放たれる。

あの子が走ると  
その勢いに  
風が目覚ます。  
冷たく研いだ輪郭で  
柔らかい頬を  
際限なく  
削り取っていく。

風と目が合った。  
主張がみなぎっている。  
風 なにを主張する？  
答えが浮かぶ間もなく  
風は次々と背後に去り  
新たに押し寄せる。

あの子は  
対峙する風にまっすぐ挑み  
風の胴体は

中心から裂かれ  
生木を裂いたように青い  
いのちの匂いが発散する。  
風は生きている。

風はつねに前からやってくる。  
風はあの子の顔に未来をぶつけ  
眉とまなじりをすどく彫り出す。  
あの子は  
風の過去を知らない。  
あの子は  
風を遡上し  
風の源流を求める。

ゴールを走り抜け  
地面に手をついた。  
あの子は  
風が止んだのを感じた。  
風は  
自分自身にぶつかってくる  
もうひとりの自分。

#### 十四 卒業式

卒業式の午後。  
誰もいない廊下。  
傘立てに一本の傘。  
入学式では  
〈持ち物ニハ名前ヲ！〉  
卒業式では  
〈発ツ鳥アトヲ濁スナ！〉  
〈私物ハスベテ持ち帰レ！〉  
あれだけ繰り返したのに。  
誰だろう？

見覚えがあるような  
ないようなシルエット。  
毎朝  
校門に立って  
生徒に声をかけてはいたが。  
週一回  
所持品検査を熱心にやってはいたが。  
ベージュ色の  
大人っぽい傘。

ソックスなら  
ひとり残らず  
目に焼き付いている。  
〈学校指定カ 違反服装カ〉  
傘は指導対象外。  
雨の日は自由があふれる。  
自由の色に  
その色を選んだ生徒のシルエットに  
感光しなかった私の両眼は  
熊の剥製のガラス玉。

私をなじるように  
きつく巻かれたベージュ色の傘。  
頭上で開くと  
持ち主の時間がひとひらと落ちてきた。  
私はそれを  
そっと舌にのせる。  
いつかその子に再会した時のために  
残りをハンカチで包み  
ポケットに入れる。

## 十五 全校朝礼

黙禱が終わると  
私は目を開けて  
無人の演台と  
その向こうのスクリーンを見る。  
半透明の校長先生が  
笑顔で  
何か生徒へ語りかけている。  
校長室の机にあった  
今朝の校長講話の草稿を  
サイレント映像に重ね  
教頭が代読する。  
ややかすれた声が  
広い体育館に集まった  
生徒の隊形を  
さまよっていく。

校長先生は先週の  
水曜日に倒れ 急逝した。  
木曜日 仮通夜。  
金曜日 本通夜。  
金曜日の客はみな  
大津波やコンビナート火災のテレビ中継に  
無言で見入っていた。  
土曜日 告別式。  
九州新幹線  
全面開通  
記念セレモニーに  
出演するはずだった  
ダンス部と  
吹奏楽部と  
応援団部の生徒たちは  
葬儀場でパフォーマンスを行い

校長先生を見送った。

私と校長先生との  
あいだには  
二重の壁ができた。  
生きている人間 と  
死んでいる人間 という壁。  
大震災を知った人間 と  
知らないままの人間 という  
もっと厚い壁。  
寂寥と虚しさに  
身体がつよく絞られていく。  
校長先生は  
二度死んだのだった。

スクリーンに揺曳する  
校長先生の口から  
地震を  
津波を  
水素爆発を  
語る声は  
まだ聞こえない。  
震災を  
知らぬまま逝った人と  
言葉を交わしたいという衝動が  
地図からはみだした道へと  
私を駆り立てる。  
校長先生の知らないことを  
私は知っている。  
私から損なわれてしまったものを  
校長先生は持ち続けている。

## 十六 寄宿舍

寄宿舍では夕食後に教育相談の時間がある。苦悩を理解してほしい生徒は体内に溜まったものを吐き出し実習室で缶詰に加工して持参する。舎監教諭は夜食にそれらを試食しながら生徒の苦悩を知る。理解や共感にまで至ることもある。最近では苦悩の量が増え種類も多様化し試食が追いつかなくなっている。舎監室の押し入れには増え続けた苦悩の缶詰が整然と保管されており深海の納骨堂のような光景におもわず厳粛な気分になる。

今夜一つ目の缶を開けると発酵しすぎた納豆だ。こんなものを体内で作り出した生徒の苦悩に説明は要らない。ただちに共感する。この子は今日は保健室でうなされていたな。明日さっそく声をかけてみよう。

今夜二つ目の缶を開けると暗緑色のラ・フランスだ。苦悩がこんな洋梨の形で体内に実体化した生徒がよくいたものだ。試食は半信半疑だ。あふれる寸前で踏みとどまる果肉。引火して惨事をまねきそうな芳香。じらすように計算された糖度。咀嚼への隠微な抵抗と瞬時の甘い瓦解。飢餓感だけを残して消える罪つくりなネクター。溺れれば危険な毒だ。共感したときには致死量に達していたという類の苦悩だ。この子と話すときには一対一にならないように気を付けよう。

今夜三つ目の缶を開けるとサバイバルナイフが一丁入っている。こんなものを体内で作り出した生徒の苦悩には私にも覚えがある。護身用の御守りが必要だったのだろう。でも体から取り出すときには自分の内臓を傷つけずには済まない代物だ。それをよく手放してくれた。試食のつもりで刃を舐めると舌を切った。

今夜四つ目の缶を開けると胎児が入っている。開けた瞬間 胎児はふうっと息をした。こんなものを体内で作り出した生徒の代わりに私は胎児を引き取って育てることにした。